



# 心の歌を奏でて

---

—四護邂逅— ①

---

芳田尚哉

---

『時の口』を抜けると、そこは白銀の世界だった。

――なんて、文学的な事を言ってる余裕はこれっぽっちもない。

「トールちゃん、大変な事になってるよ」

「俺もだっこの」

さて、どういう状況なのか説明せねばなるまい。

目の前は、白銀のゲレンデ……などという優雅なものじゃない。銀世界なんて言葉が綺麗すぎて、今の俺たちの状況には合っていないな。

確かに雪だ。

都会じゃ珍しいだろう。

山の中だったわけだから、冬は雪まみれだった。

それも懐かしい。

でもって、俺が体験している雪国の雪状況なんて、可愛らしいものだ。ここは、積雪何メートルなんだろう？ 一〇メートルは軽く越えてるんじゃないだろうか。なにせ、遠くに見える木は、先端しか見えていない。あれが、二メートルくらいの木でなければ、そういう事になる。

地面が遠い。

そんな足場なのだ。

そういうわけで、俺たちは絶賛ズブズブ沈み込み中。

俺たち自身もだけど、荷物が大変だ。

こういう状況では、トロリーケースなんて、その便利機能が全く発揮できない。普通の鞆だ。

トロリーケースだという事で、重い荷物なわけで……もうどうしようもない。

「トールちゃん、助けてえ！」

「むしろ、俺が助けて欲しいっての！」

大きな声じゃないと、雪に吸収されて聞こえない。だが、大声で話すにはそれなりの体力が必要になる。それだけで、体力は消耗されてしまっている。

それに、俺の方が圧倒的に荷物が重い。主にあのスパイスのせいだな。

「たあすうけえてえ……」

キヨカの声が遠くなっていく。かなり沈んでいるようだな。

そんな俺も、そろそろ頭まで沈みそうだ。目の前が雪の壁だ。

このまま、俺たちは雪に埋まってしまうのだろうか。

ああ、俺たちの旅はここで終了らしい。

それにしても、雪の中って結構温かいかも。

基本的には寒いんだがな。

もうダメだ。

まさか、こんな結末だとはな……。

「アーちゃん！」

キヨカの叫びが微かに聞こえた。

って、蜘蛛(アラネーオ)？

おいおい、大丈夫なのか？

「……あぁっ！ アーちゃん戻って！」

どうしたんだ？ 蜘蛛(アラネーオ)を戻すのか。

よくわからんが、この状況で蜘蛛(アラネーオ)はまずかったってわけだな。

蜘蛛(アラネーオ)にもどうにもできないのか。だろうな。こんな足場もない所で、どうするんだっての。糸なんかも意味ないだろうし。

この状況で助けを求める相手はいないだろう。俺たち以外、ここにはいないっぽい。一瞬だけ見えた感じだと、人がいる気配がないものな。集落はおろか、そもそも人がいそうもない。

やっぱり、俺たちはここで終わってしまうんだ。

だが、俺たちの旅は、まだまだこれからだっ！

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

――って、これはなんだか違うな。

だけど、本当に終わりそうだ。

ああ、そろそろ意識が……。

眠くなって……こないもんだな。意外と大丈夫そうだ。

かといって、この状況でなにもできやしない。

まだまだ絶賛沈み中。

どこまで沈むんだろうね。

現在は、雪が降ってないだけマシなのか。もし降ってたら、完全に埋まってしまうな。俺たちが沈んでいる穴に、雪が積もって行って……。

悲惨だ。

考えるだけで悲惨だ。

これはなんとか回避せねば。

だけど、足場もないし、どうしたらここから脱出できるんだろう？

助けなんて来ないもんな……。

「大丈夫か」

そんな声と同時に、首根っこを掴まれる。

うげっとなったと同時に、なにが起こってるのかを考える。

……………わからん。

だが、とにかく、俺たち以外に誰かがいるらしい。

「しっかりしろ。すぐに引き上げる」

野太い感じの声だ。おそらく、がっしりとした体格なんだろう。

ああ、これが俺を迎えに来た天使なのか。男かよ……。女の子がよかったな……。

そんな事を思っている間も、ぐいぐいと体を引き上げられる。

ああ、天に昇るのって、こんな感じなんだ。もうちょっと、光輝くようになっていうか、光に満ちた感じだと思っていたんだが、あんなのは想像の世界だけなんだな。

もしかして、地獄行きだからなのか？ 俺ってそんな犯罪じみた事はしてないつもりだったんだがな……。

閻魔様って、六欲天の第何天から来てるんだっけか。どうでもいいか。

こういう事になったわけだし、俺にはどうする事もできない。

神様だって、俺を生き返らせる事なんてできないだろうし。

キヨカもこういう事になってるんだろうな。キヨカをこんな風にしてしまっって、じいさんにボ

コボコにされるんだらうな。つうか、じいさんよりも先にこういう事になるなんてな……。

命懸けの旅だったのはわかってたつもりだが、いざこうなるとな……。

思ったよりも呆気なかった。

人生なんてこんなものなのかな。

突然、なにが起きるかわからない。

そういうもんだよな。

そういえば、走馬燈って見てないんだが。せっかくだし見てみたい。なにがせっかくなのかわからんが。

「おい、気をしっかり持つんだ」

ああ、首が締まっていく。息苦しいよ……。

……って。

あれ？

息苦しい？

……もしかして、俺ってまだ生きてるのか？

そうだよな。

生きてるからこそ、息苦しいって感じれるんだよな。

じゃあ、これって……。

「大丈夫か」

ぐいっと、今までとは違って、一気に引っ張られる。

おえっ！ となった。

そして、どさりと雪の上に投げ出される。

ああ、空が広いな、大きいな……。

快晴とはいかないまでも、どんよりとした感じの灰色の空でも、今はとても綺麗なものに見える。

俺はどうやら、雪の上に大の字になって寝ているらしいな。

……って、

「寒っ」

いきなりこういう世界だったので、当然ながら防寒具なんか着ていない。まだ長袖だったからいいものの、半袖でこういう事をしてたら、あっという間に凍死だ。凍傷も確実だ。

まあ、今もその危険性はかなりのものだが。

「ほら、荷物だ」

と、どさりと大きな音がする。

そっちを見ると、そこには大きな橇(そり)のようなものがあつた。橇(そり)だよな？

筏(いかだ)と橇(そり)を合体させたようなものがそこにあつた。

俺のトロリーバッグが、そこに載っている。

よく見れば、キヨカのトロリーバッグもあつた。それは開封されていて、中身が少し周囲に散乱している。

「ふい～、助かったよ～」

と、聞き慣れた声がした。

「あっ、トールちゃんも助かったんだね。よかったよかった」

んあ？ と見ると、そこには、ぶくぶくと防寒着で丸くなったキヨカがいた。

とにかく、持っていた服を全部着たんじゃないかって感じだ。

「ほら、トールちゃんも早く着た方がいいよ。せっかく助かったのに、凍死しちゃうよ」

と、俺の荷物を漁っている。

まあ、別に咎めるつもりはないけどな。

「キヨカ……」

と、俺は言ったつもりだったが、どうやら口がうまく動かないらしい。手も凍っているようで動かない。

「どうしたの？ ……って、なんだか、かちんこちんだよ。ほら、服を着せてあげるね……って、腕が動かないよ」

「そっちの彼を乗せてくれるかしら」

なんだか、聞いた事のない女の人の声がした。

かろうじて声として聞こえるが、内容まではよくわからなくなってきた。耳が痛い。慣用句的なものじゃなくて、実際に痛い。

意識が遠くなりそうだ。

「よいせっと」

俺の体が浮いて、どさっと落とされた。

普段なら痛いと感じるんだろうが、今の俺にはそういう感覚すらなかった。なにも感じる事ができなくなっている。

「あなたも乗って」

「はい」

「じゃあ、行くわよ」

なにか声が聞こえると、がくんと動き出した。

どうやら、俺はなにかに寄せられて運ばれているようだ。

「トールちゃん、大丈夫？」

キヨカなのか？ なにか言ってるようだが、やっぱりよくわからない。

なんだか、とてつもなく眠くなってきた。

「こら、寝るなっ！ 寝ちゃダメっ！」

ぴりっと頬が痛いような気がする。だけど、気のせいかもしれない。

「トールちゃん、起きなさいっての」

「ぐぼっ！」

腹に激痛が。

これはさすがにわかる。

つうか、なにもかも吐きそうだ。胃が、肝臓が、小腸が、十二指腸が、結腸が、空腸が、回

腸が、盲腸が、大腸が……あらゆる内蔵が潰れるかと思った。

「がっ、がはっ」

だけど、そのお蔭で頭がはっきりしてきた。

「トールちゃん、寝ちゃダメだよ」

耳は相変わらずだ。

だけど、目が覚めても、あんな事をされたら、永眠してしまいそうだ。これはこれで、命が危ない。

「彼は大丈夫そう？」

「……多分」

「もうすぐだから」

「ありがとうございます」

ぼんやりと、なにかを話しているんだなって事だけがわかる。なんだか、こういうのって変な感じだ。

橇(そり)は速度を上げ、雪の上を滑っていく。

速度を上げると、その分風が強くなって……寒い。

ああ、寒いって感じるほどにはなってきたのか。そういえば、なにか羽織るものを掛けられているようで、少しだけ温かくなっているのかも。

ほとんどの感覚がないけど。

「着いたわよ。彼を早くあそこへ」

と、俺の体が浮いている。誰かに抱えられているようだ。格好からして、お姫様抱っこってやつかな……。

まさか、そんな事をされる時がくるなんて……。

「トールちゃん、よかったね。これで大丈夫だよ」

ああ、キヨカがなにかを言っている。

すまん。よくわからないんだ。

でも、なんだか温かい気がする。

凍っていた体が、徐々に溶けていくようだ。

まさに解凍されている食材のようだ。

ああ、俺ってもしかして、このまま美味しく調理されるのかな。人肉って旨いのか？

同じ人間同士だとどうだか知らないが、他の種族からしたら美味しいのかもな。古今東西の物語には、よく食人の存在が描かれているし。

俺も誰かに食べられてしまうのか。

もしかしたら、キヨカも同じように……。

なんとなくだけど、女の子の方が美味しそうだよな。

ははっ……。

なに考えてんだろ、俺。しっかりしろってんだ。

じんわりと温かくなってきて、耳も聞こえるようになってくると、なにやらパチパチという音

がする。

っていうか、体の半分だけ――主に左半身だけが熱い！

最初は、体が凍っていたせいか、じんわりって感じだったんだが、今はもう完全に焼かれてるって感じだ。

やばい！

このまま丸焼きかっ！

「うわっ」

ある程度だが、動けるようになったので、熱い方とは逆に転がる。

「あわっ！ トールちゃん、どうしたの」

俺の動きに驚いたのか、キヨカが叫ぶ。

「もう、大丈夫なの？」

大丈夫もなにも、あのままだったら俺は美味しく焼かれてパクリだっただろ。

「キヨカ……俺、生きてるよな」

なんとか声が出た。

「生きてるよ。私たち、助かったんだよ」

そう言いながら、まだ寝ころんだままの俺に、毛布らしきものを掛けてくれる。

「起きれるようになったら、厚着しようね」

そうだな。確かに寒いまだ。

少しでも体が動くようになって、体を起こす。

「適当でいいよね」

と、キヨカが俺の荷物から、冬用の服を出してくれる。

俺は渡されるまま、セーターやダウンジャケットを着る。

下もウインドブレイカーを履く。

これで、寒さをなんとか凌げるだろう。

「よかったね。トールちゃん。助かっちゃったよ」

キヨカがニコニコ笑顔だ。

「なあ、俺たちって生きてるよな」

「なに莫迦(ばか)な事言ってるのかな。当たり前だよ。私たち、ちゃんと生きてるよ」

そっか……よかった。生きてるって素晴らしい。

「ちなみに夢じゃないよ。なんなら、思い切り殴ってあげようか？」

嬉しそうに言われると怖いな。

つうか、普通は頬を抓って確認するんじゃないのか？

とにかく、生きてるのは間違いなさそうだ。それに、夢でもなさそうだ。

なにせ、寒いからなっ！

寒すぎだろ。

近くに焚き火があるので、なんとか暖をとれているが、これがなかったら凍ってるな。

「ようやく目が覚めたみたいね」



「無事でなによりだ」

ん？ 誰だ？

女の人と、男の人の声だ。

そういや、意識が遠くなっていた時も、そんな声を聞いた気がする。

焚き火の方を見ると、なんだかピッチリとした服を着た人たちがいる。

女の方は黒髪のポニーテールで、すらっとした人だ。まあ、綺麗な人だと思う。

男の方はがっしりとした体型で、屈強な男って感じだ。プロレスラーとか、そんなイメージだ

。

「なあ、キヨカ、この人たちは誰だ？」

「えっとね……私もよくわからないんだけど、とにかく、私たちを助けてくれたんだよ」

俺たちを助けてくれたのか。

あのままだと、雪の中だったもんな。冷凍人間になるところだった。

それを助けてくれたのは感謝だ。

しかし、よく俺たちを見つけられたよな。

すっげえ偶然というか、俺たちの的には超ラッキーだ。

「あの……ありがとうございました」

助けてくれたわけだし、悪い人ではなさそう。

ピッチリした服が気になるが、この世界ではそういうものなんだろう。

「当然の事よ。なんたって、あなたたちも資格者(ティトーロン)みたいだし」

「本当に助かりました。私もトールちゃんも、あのままだったらどうなったか……」

「それは、この子に言ってあげて」

と、女の方が隣にいる巨大な狼を撫でる。

「……………っ！」

狼だっ！

しかも、尋常じゃない大きさだぞ。座っている今の状態でも、かなりの大きさだ。これで立ち上がったらどうなるんだろう。

怖い。食われちまう。

思わず後ずさる。

「大丈夫よ」

大丈夫と言われても、怖いだろ、それ。

「可愛いですね」

キヨカは物怖じする事なく、その巨大な狼を撫でる。

……………本当に大丈夫なのか？ そのまま、がぶっとされたりしないよな。

「安心しろ。危害を加える事はない」

「そう……ですか」

かといって、安心できるものじゃない。

それにしても、あの狼、やたらとキヨカに懐いてないか？ あいつって、そういう性質なんだ

ろうか。

「やはり、資格者(ティトーロン)には同調しやすいようだな」

男の人が呟く。

「そういや、さっきからこの人たちは、資格者(ティトーロン)って……。」

「それって、俺たちしか知らないんじゃないか……。」

「狼(ルーポ)、しばらく休んでくれ」

男の人がそう言うと、狼(おおかみ)の姿が消えた。

「——いや、違う。」

正確には、あの巨大な狼が男の人の手に吸い込まれていった。

「どういう……」

「どういう事だ？」

「あまりの事に言葉が出ない。」

「どうしたの？ 驚く事でもないでしょ？ だって、あなたたちにも門番(ポーディスト)がいるでしょ？」

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

門番(ポーディスト)だって？

俺たちが知っている門番(ポーディスト)は蜘蛛(アラネーオ)だ。

「じゃあ、あの狼さんもアーちゃんと同じ門番(ポーディスト)なんだ」

「アーちゃん？」

女の人が首を傾げる。

「アーちゃんってのは、こいつが勝手につけた名前です」

「そうなんだ」

……って、なに当たり前のように話してるんだ。

この人たちは何者なんだ？

門番(ポーディスト)や資格者(ティトーロン)を知っている。

それにあの狼は、キヨカの蜘蛛(アラネーオ)と同じように……。

もしかして、この人たちもそうなのか？

だけど、じいさんが言うには、俺たち以外にいないはずだ。

神様だって、俺たちだけだって……。

どうなってやがるんだ？

「もしかして、二人も蟲(ベステート)を封印してるんですか？」

「ええ、そうよ」

キヨカの質問に、女的人是はあっさりと答える。

えっ？

この人たちも？

どうなってるんだ？

「でも、神様はそんな事言ってなかったよね」

キヨカが俺を見る。

「そうだな。他にはいないって……」

「神様って、もしかして、あなたたちの時代って、D i o(神)の能力者がいるって事？」

「でーお？ なに、それ」

「あなたたち、確認したい事があるんだけど……名前は？」

突然だな。

「えっと、私は遠野(とおの)心歌(きよか)です」

「俺は、京極(きょうごく)公(とおる)です」

よくわからんが、とりあえず名乗る。

「遠野に京極……。不思議な組み合わせだな」

ずっと黙っていた男の人が呟く。

「そうね。まさか。四護(しご)同士なんて。………ん？ もしかして、それって……」

女の人が、俺の荷物にある風伯(ふうはく)を見る。

「どうかしたのか？」

「ねえ、あれって……」

女の人に言われて、男の人も風伯に気付いた。

「あれは誰の？」

間違いなく風伯を指している。

「あれは、トールちゃんのです」

キヨカがさらっと答える。

警戒心ってもんがないのか。それとも、俺たちの事を知ってそれで安心感があるのか？

「あなた、確か京極って言ったわよね」

女の人射抜くような視線に背筋が凍りそうになりながら頷く。

「え、ええ、そうですけど……」

あまりの視線にたじろいでしまう。なんだか怖い。

「あれって、雷公(らいこう)なの？」

らいこう？

それって、なんだ？

「あの刀だったら風伯ですよ」

キヨカが代わりに答える。

「風伯？ 風伯は逢稀(あき)のもののはずだけど。どうして譜遊(ふゆ)のあなたが持ってるの？」

えっと……そうか。風伯は、キヨカの家——遠野のものだもんな。

俺の家も、四護らしいから、四刀(しとう)があるんだろうけど、それがライコウというものなんだろう。

「そもそも、四護が揃っているなんて、どうなってるのかしら。あなたたちの支家(しけ)はどうしたのかしら？」

支家？

そういえば、じいさんがなにか言ってた気がするけど……よくわからない。

「支家って、私たちの家の補助をしてくれてた家だよ」

「そうよ。支家は、四護の補佐が役目のはず。四護が四刀を振るう時、支家は門番(ポーディスト)を使役するのよ」

なんと、どうやら本来門番(ポーディスト)は、支家が使役するらしい。まあ、俺たちの場合は、両方とも四護の家なので、役目が変なのか。

だけど、俺たちの支家って誰なんだろうな。そもそも、そういうのが廃(すた)れてる時代だからな……。

「私たちの支家って、誰なんだろうね」

「ちょっと待って。あなたたちの時代は、四護や支家はどうなっているの？」

「どうなっているものにも、そういうのはほとんどないっていうか……」

「私たちも、自分たちがそういう家系だって知らなかったもんね」

それを聞いた女の方は、そんな……と声を洩らして膝をついた。

「四護や支家がそのお役目を果たしていないなんて……。そういう時代が来るという事なの？

ねえ、詩稀(しき)はどうなっているの？」

詩稀って、あの廃村だよな。白西山(はくせいざん)の向こうの。

「詩稀村は、結構前になくなりました」

「ちょっと、なに言ってるの？」

突然、女の人が襟を掴んでくる。

「詩稀がなくなったってどういう事？ あなたたち、D i oの能力者がいるって言ったじゃない」

そのまま前後に揺さぶってくるので、ぐえっと声が出るだけで息ができない。

「雛罌粟(ひなげし)様、おやめ下さい」

男の人が女の人を止めてくれたので、ようやく息ができる。

「はあ～、死ぬかと思った」

「失礼した」

「ごめんなさい」

ようやく冷静になったのか、女の人が頭を下げる。

「まあ、トールちゃんがどうされてもいいんだけど」

「よくねえよ」

「あっ、そうだね。二人じゃないとダメな旅だもんね」

それだけの理由か。

「それはいいとして、なにかあったんですか？」

どうでもよくないんだがな。とにかく、今は話を進めたい。どうして俺がこんな目に遭わないといけないんだ？

「本当に申し訳ない。神の能力者がいるというのに、四護としての役目を果たしていないと聞き、つい頭に血が上ってしまったんだ」

「支家として、我の無礼をお詫びさせていただく」

「別に、龍堂(りゅうどう)が悪いわけじゃないでしょ」

「いいえ、雛罌粟様。我は支家として、全ての責を負う者です。いかな罪があろうとも、四護であらせられる雛罌粟様の罪ではございませぬ。全て我の罪でございます」

「ああ、もう。そういうのはいいって言ったでしょ」

「いくら雛罌粟様のお頼みでも、そういうわけにはまいりません」

男の人の言葉に、女の方は頭を搔く。

「本当に堅物なんだから。その意固地なところ、なんとかならないものかしら」

なんだろう。そういう上下関係なのか？ 主従関係っていうか……。この人ってどこかのお嬢様？ いやいや、四護だろうし……。

「本当にごめんなさい。あたしたちの時代には、神の能力者が存在しないの。いずれ現れるはずなのだけど、まだその時ではないようなの。それでも、あたしたちはそれを信じて、日々精進している」

「神様って、ずっといるわけじゃないんだね」

「そうみたいだな」

てっきり、どの時代にもそういう人がいるもんだと思ってた。今の神様の先祖だっているだろうに。

「そういえば、まだ名乗ってなかったわね。あたしは榊都(なつ)の四護、各務(かがみ)雛罌粟。そして、こっちが」

「榊都の支家(しけ)を務めさせていただいております、鈴原(すずはら)龍堂と申します」

主に男の人——リュウドウさんだけが頭を下げる。

「改めて訊かせて。あなたたちの支家はどうしたの？」

女の人——ヒナゲシさんが俺たちをじっと見る。

「あの……私たち、支家とかよくわからないんです」

「そうなんです。俺たち、自分たちが四護だったのも、この前知ったばかりで……。そもそも、今じゃ——俺たちの時代じゃ、そういうのが全然っていうか、ほとんどないんです。残ってるのは、こいつのじいさんくらいみたいだし」

そんな……と、ヒナゲシさんが額を押さえる。

「神の能力者がいるにも関わらず、四護も支家すら機能していないなんて……。あなたたち、本当に知らないのかしら。白根(しらね)や玄田(げんだ)という名に聞き覚えはない？」

「白根さん……？」

「玄田？」

キヨカも俺も首を傾げる。

親戚はもちろん、知り合いにもそういう名前はいない。

「そんな……。四護と支家が互いを知らないなんて。だから、そんな組み合わせなのかしら」

「おそらくは。しかし、雛罌粟様。この方々は、それでも奇妙でございますな」

「そうね。支家が使役するはずの門番(ポードイスト)を四護が。そして、遠野家が所有し使用するはずの風伯を京極家が。ねえ、あなたたちは、どの時代から来ているの？」

「時代って、何年って事だよ」

「だろうな」

いきなり言われるとわからない。

「私たちは、二〇〇七年ですけど……」

そう言うと、二人は首を傾げる。

「それは、西洋の暦よね。あなたたちも倭国(わこく)の出身でしょ？」

倭国って……。

「だったら、元号で言うべきでしょ」

元号ね……。

「えっと……」

普段、あまり使わないから、よくわからない。今年って平成何年だっけ？

「平成一九年です」

俺が悩んでいる間にキヨカが答える。

「平成……。平和に成る。いい元号ね。あたしたちは、文明(ぶんめい)五年なんだけど、どのくらい時代が異なるのかしら？」

文明……。？ 何年だよ、それ。

「あの……。それっていつ頃ですか？」

キヨカが訊く。

「知らないのか……。そうね、あたしが今、二〇なんだけど、あたしが生まれた頃に、大きな乱が始まったみたいね」

「その時の元号はなんですか？」

大きな乱があったとすれば、なにか手掛かりになるかも。

「享徳(きょうとく)よ。ちなみに、あたしが生まれたのが享徳三年」

享徳……。？ わからん。そもそも、元号なんてほとんどというか、全く覚えてないな。授業で習ってもその時だけだし、それだって西暦と一致しないし。

……。って、だったら、さっきの質問は意味ないじゃん。俺って莫迦か。

「織田(おだ)信長(のぶなが)って知ってます？」

この人が生きてる時代なら、なんとなくわかるかも。とにかく、なにか手掛かりを。

「わからないわ」

そっか……。

「尾張(おわり)の国のはずなんですけど……」

「尾張ね……。郡上(ぐじょう)の東(とう)様なら知っているけど」

東？ 誰だ？ つうか、郡上ってどの辺だ？ つうか、尾張の事を訊いたのに。

こうなったら、違う手掛かりが欲しい。

「今、国を治めているのは、誰ですか？」

「今？ もちろん足利(あしかが)様よ」

足利？ 室町かよ。

「足利の誰ですか？」

「足利義政(よしまさ)様だけど」

足利義政って……。銀閣寺の人だっけ？ 他になにをしたのか知らないな。

「トールちゃん、思い出したよ」

突然キヨカが大きな声を出す。

「おわっ、どうしたんだよ」

「思い出したよ。享徳って、享徳の乱があった頃だよ」

「享徳の乱？ なんだ、それ。そんなの習ってねえぞ。その辺の時代なら、応仁(おうにん)の乱だろ。ここから戦国時代に突入したんだろ？」

「そんなのも知らないの？ 大学生なのに？ 享徳の乱っていったら、戦国時代の始まりのひとつじゃない。享徳三年の一二月二七日の深夜だよ」

キヨカがさも当たり前のように言う。

「いやいや、戦国時代の最初って応仁の乱だろ？ つうか、なんだよそのピンポイントな日時は」

「応仁の乱はもう少し後。一〇年後くらいだよ。享徳の乱に関しての日にちは、ちゃんと記録があるんだよ。鎌倉の浄明寺(じょうみょうじ)四丁目付近で起こったんだよ。しかも二八年くらい続いたんだよ。終わったのが文明(ぶんめい)一四年の十一月二七日。これ常識だよ」

「そうなのか。っていうか、どうしてこいつはこんなに知ってるんだ？ しかも、享徳の乱について熱く語りすぎじゃないか？」

「それにしても、応仁の乱が西暦……何年だっけ？」

「ちくしょう。全然覚えてねえぞ。」

「享徳の乱があった年ならわかるよ。えっとね…… `石越しに京都くん、とか `いよ！ ご用心。享徳の乱、とか `ひとし御用だ！ 享徳の乱、だから、一四五四年だったかな」

「なるほど……」

「すげえ語呂合わせだが、こいつはどうしてそういうのを知ってるんだ？ つうか、京都くんってなんだ？ ひとしって誰だよ。」

「そんな語呂合わせ、誰が考えたんだ？ わかりやすいような、わかりにくいような。ちょっと面白いけどさ。」

「どう？ わかったかしら？」

「俺たちの話を黙って聞いていたヒナゲシさんが訊いてくる。」

「はい。わかりました。私たちは、ヒナゲシさんの今の年から、だいたい五三〇年くらい後です」

「五三〇年か……。そのくらいになると、四護や支家が……」

「ヒナゲシさんは、どこか淋しそうに呟く。」

「そっか……。その時代の東さんって、もしかして東常縁(つねより)さんかな」

「おお、常縁殿をご存じか」

「リュウドウさんが嬉しそうに答える。」

「当然だよ。素晴らしい人だと思うよ」

「左様か。常縁殿は後世にも名が……」

「すまん、誰だそれ」

「トールちゃん、東常縁さんを知らないの？ 本当に大学生なのか疑問だよ。もしかして、斎藤(さいとう)妙椿(みょうちん)も知らなかったりするんじゃないか……」

「そんな人を知らなくても、大学生にはなれるっての。そもそも、授業で出てこないだろ。」

「戦国武将なら、習ってなくても知っている人がいるかもしれないが、まだ戦国時代の前だろ。無理ってもんだ。」

「斎藤だったら、斎藤道三(どうさん)くらいしか知らないぞ」

「普通、そうじゃないか？」

「戦国武将だったら、織田信長が思い浮かぶだろ？ その関係で、斎藤と言われたら、道三が思い浮かぶはずだ。それが普通だと俺は思うんだけどな……。」



「トールちゃん、どこまでもダメダメだよ。確かに斉藤道三は有名だけど、時代がもうちょっと後だし。ちなみに、斉藤妙椿と斉藤道三に血縁関係はないからね。一説では、美濃(みの)の国を支配するにあたって、過去にこの地を治めていた斉藤家にあやかって、斉藤を名乗ったともいわれてるんだよ」

どうしたんだ、キヨカのヤツは。急に目を輝かせて語りだしたぞ。

「そっか……。トールちゃんは、なにも知らないんだね。とにかく、東常縁さんって、凄いんだよ」

「だから、なにがすごいんだ？」

「あのね、和歌で奪われた所領を取り返したんだよ」

「和歌って……あの五・七・五のあれか？」

「そうだよ。正確には、五七調のものなんだけど。――とにかく、その和歌で血を流さずにやり遂げたんだよ。その相手が、美濃の斉藤妙椿だったんだけどね」

「そりゃすごいな」

なんだ、その無血開城。

しかも、和歌で成し遂げただとお。

俺の和歌を聴けえっ！

――って事か。

想像できないな……。

和歌で取り戻すって……。どうすりゃ、そんな事ができるんだ？

なんだか、ファンタジーなバトルが行われたのか？

なんつうか、和歌を詠うと、モンスターが召還されて、そのモンスター同士のバトルで……なあんて、そんなのそんな時代にあるはずないわな。

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない。ただ、どうやって和歌で取り戻せたのかな……ってな」

「なんでもなくないじゃん。すごいんだよ、東常縁さんって」

なんだか力説されそうな勢いだぞ。

「ま、まあ、その辺はゆっくり後で聞くわ」

「そう？ じゃあ、後で力説してあげるね」

後悔。

こいつはマジでする気が……。言わなきゃよかった。

口は災いの元。

「とにかくね、東常縁さんの和歌で、とっても素敵なのがあるんだよ」

「語るのかよ」

力説は後じゃないのか。

「別に力説じゃないもん。すっごくいいんだよ。感動だよ。泣けるよ。号泣だよ。キヨカちゃん大号泣なんだよ」

既に力説している気がするんだが、どういう事だ、これは。

「とにかくいいんだって。トールちゃんも聞けば大号泣だよ。胸キュンだよ」  
よくわからん。  
泣いて、胸キュン？  
「どう？ 聞く？」  
聞く？ って、言いたいんだろうな。  
だが、あえて言おう。  
「いいや、別にいい」  
「聞くよね」  
予想してたか。即返しだ。  
「聞かないって選択肢は？」  
「聞くか、ヒアーで答えなさい」  
すっげえ選択肢だぞ。  
「わかり申した。拝聴しよう」  
こう言わねば、延々と繰り返すだけだろうな。  
さらに、後で力説までされるのか。  
どうして、こんな展開になったのか。  
もうそれを考えるだけ無駄か。こうなったいじょう、どうしようもないのだろう。  
「聞きたい？ 聞きたいんだ。あのねえ、いつわりの 言の葉ながら 思うぞと 人の心を 聞く世ともがな、ってのがあるんだよ」  
なんか、意味は分からないけど、いい感じの和歌だな。  
「私もそういう気持ちかな……。偽りはイヤだけど」  
キヨカの気持ち？ なんだ？  
(たとえ嘘でもいい。せめて一言、愛しているとあの人の口から聞いてみたいなあ……って、ホントだよ。トールちゃんのバカア)  
よくわからんが、キヨカがうっとりしてやがる。こいつ、どうしたんだ？  
「トールちゃんのバカア」  
なんだ、いきなり。つうか、何度も何度も……。はあ～。いまさらだな。  
「四護も支家もないなんて……。嘆かわしい」  
ヒナゲシさんはヒナゲシさんで嘆き続けていた。  
「常縁殿はそうか……。素晴らしいお方だ……」  
リュウドウさんも、ずっと感心していた。  
なんだ、これ。  
どういう状況なんだ？  
この状況で、俺はどうすればいいんだ？  
誰か教えてくれ。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

.....なんだかよくわからない自己紹介タイム(?)が終わったようだ。

とにかくわかったのは、この人たちは俺たちのずっと昔の四護と支家だって事だ。直接的な先祖ではないようだが。

同じ使命を持った人たちだったんだ。

「それにしても、アーちゃん以外にも門番(ポーディスト)っているんだね。しかも、狼(ルーポ)さんだし」

キヨカは羨ましそうに、リュウドウさんの手を見ている。

「また見たいな.....」

「申し訳ございませんが、無闇に使役するものではありませんので」

キヨカのおねだりをさらりとかわすリュウドウさん。そりゃ、見たいってだけでな.....。

「あなたが持っている風伯を見せてもらってもいい？」

「別にいいですよ」

断る理由はないよな。この人も、四刀を持っているみたいだし。

「これが逢稀の風伯か.....」

「ヒナゲシさんって四護なんですよ？ 他の四刀って見た事ないんですか？」

「それはないわ。四刀は、それぞれの家に代々伝わる、神聖なものだもの」

「そうなんですか.....」

そんなに大事にされてるんだ.....。

「家の外には出せないものなのよ。.....って、ん？」

ヒナゲシさんは抜こうとして力む。

「あれ？ .....やっぱり、抜けないんだ」

どうやら、四護であるヒナゲシさんでも抜けないらしい。そういや、じいさんも抜けないとか言ってたな。でも、他の四刀を抜けるヒナゲシさんでも、他の四刀は無理.....と。

「そういえば、ヒナゲシさんも四刀を持ってるんですよ」

「ええ。これよ」

と、ヒナゲシさんが差し出したのは、記憶にあるものだった。

「これが、あたしの四刀——炎帝(えんてい)よ」

その炎帝という四刀は、俺がばあちゃんの家の下で見つけた、あの赤い鞘の刀だった。

(あれが炎帝だったのか)

まさか、あれが伝説の刀だったとは。

確かに抜けなかった。

俺は風伯を抜けているのに、椰都の四刀である炎帝は抜けなかった。やっぱりそういうものなんだ。

「それにしても、二人の服って昔っぽくないですよ」

唐突にキヨカが言い出した。

確かに、この二人の服はそれっぽくない。室町ってやっぱ着物だよな。

「これ？ これはね、前に行った世界で買ったの。とっても暖かいの。こんなに薄いのに、寒さを感じないの。すごい世界もあるのね」

どれどれ……と、キヨカがヒナゲシさんの服を触る。

ああ、あれって女の子だけの特権だよな。男がしたら犯罪だ。

「ホントだ……。すごい暖かいよ。これ、すごいよ。私も欲しいよ……」

欲しいとか言ってもな……。無理だろ。

「ごめんなさいね、これはそれぞれ一着ずつしかないの」

だろうよ。あったとしても、もらうわけにはいかないだろ。

「その世界、私も行きたいな……。トールちゃん、行こうよ」

「無理だろ。つうか、俺たちは蟲(ベステート)を封印しないとイケないだろうが」

「そうだったね。てへり☆」

……………絶句。

緊張感なんて微塵もないよな。

「雛罌粟様」

「ええ」

瞬間、緊張感が増した。

空気が張りつめるってこういう感じなのか？

「あなたたちも手伝って」

そう言うなり、ヒナゲシさんは炎帝を俺から奪い、代わりに風伯を渡される。

「手伝うって……」

状況がわからないままの俺たちだったが、リュウドウさんが門番(ポーディスト)である狼(ルーポ)を召還する。

「雛罌粟様、参りましょう」

「あなたたちも乗って」

俺たちは、訳がわからないまま櫓(そり)に乗る。

「じゃあ、お願い」

了解、

ん？ これって、狼(ルーポ)の声か？

次の瞬間、俺たちを乗せた櫓(そり)は、ものすごいスピードで走り出した。

「どうしたんだろう？」

キヨカが訊いてくるが、俺にわかるはずもない。

「蟲(ベステート)よ」

ヒナゲシさんが答えてくれた。

「蟲(ベステート)？ そんなのわかるんだ」

「すげえな」

俺たちには、到底そういうのはわからない。

この人たちって、相当凄いんじゃないだろうか。

感心している間に、蟲(ベステート)の姿が見えてきた。

そこには、なんというか……巨大なダンゴムシらしきものがいた。その長さ、一〇メートルくらいだろうか。

「すごいね……」

「ああ」

俺たちは呆気にとられていた。

「ようやくね」

「そうでございますね」

「待ってたのよ。ようやくね」

橇(そり)に乗ったまま、ヒナゲシさんは炎帝を抜く。

その刀身は、鞘と同じく赤々としていて、まさに燃えているかのようだ。

「退治してあげる」

そう言うと、刀身から炎が。メラメラと刀が燃えている。

「トールちゃん、燃えてるよ」

「ああ、燃えてるな」

どうなってるんだ？

火をつけたわけでもない。つうか、燃えてる刀を持っていて、熱くないのか？ 火傷しそうだぞ。

「雛罌粟様」

「ええ、そっちはお願いね」

「かしこまりました」

ずざざっと橇(そり)が停まり、ヒナゲシさんが降りる。

「あなたも来て」

えっ？ 俺？

「頑張ってね、トールちゃん」

キヨカの笑顔に見送られるようにして、俺も橇(そり)を降り……ずぼっと雪に沈んだ。

「ちょっと……ちゃんとかんじき履きなさいよね」

「こちらをどうぞ」

ヒナゲシさんに引き上げてもらい、リュウドウさんが放ってくれたかんじきを受け取る。

どうやって履くんだ……と思ったが、なるほどね。足を乗せて紐でくくる。

よし、これで雪の上でも立てるぞ。

よちよちとおぼつかない足取りだが、それでもなんとか移動する。

「遠野様の門番(ポーディスト)は、この世界には不向きかと思われます。それに、あの蟲(ベステート)は、我々の獲物のようですので、こちらで待機していただけますか」

「わかりました。うう、寒っ」

そりゃ、こんな雪の中じゃ蜘蛛(アラネーオ)はとてもじゃないけど、動けないだろう。

「早急に片付けるわよ」

と、ヒナゲシさんは炎帝を降り下ろす。

「うわっ」

すると、炎帝が纏っていた炎が、蟲(ベステート)目掛けて飛んでいく。まるで炎を投げたみたいだ。

「あなたも風伯を」

「えっ？」

俺はどうしたら？ 俺もあれをしると？

そもそも蟲(ベステート)との距離はかなりある。蟲(ベステート)が大きいからここからでも認識できるだけで、距離としては二〇メートルくらいはあるだろう。そんな距離は俺の間合いじゃない。

「ほら、風伯の力を使って」

風伯の力？

そんな事を言われても、どうしたらいいんだよ。俺には、あんな事はできない。

……いや、そういえば前にもあったな。確か蜘蛛(アラネーオ)が集中して斬れって……。

俺は風伯に全ての神経を集中させる。

そして、風伯が風を纏っているイメージ。

……どうだ。

……………ダメだ。

集中が足りないのか？

まあ、寒くて集中できてないってのもあるのかもだけど。

ちくしょう。どうしよう。

「早く。風伯の力を貸して」

そんな事を言われても……。

「もしかして、風伯を使いこなせてないの？」

そうなんです……とは、なかなか言い出せそうにない。

「そんな……」

そんな哀しい目で見ないで。

「トールちゃん、役立たずだよ」

キヨカの弦きが痛い。

「しょうがない。あたしだけでなんとかしないとね。この状況だと、少し不利だけど、なんとかするしかないわね」

そう言うと、炎帝が再び炎に包まれる。

あれが炎帝の本当の力なんだよな。きっと、風伯でもああいう事ができるはずなんだ。

ヒナゲシさんは、それを自在に使えるのに、俺は……。

どこまでも役立たずってわけか。

「ていやあ！」

ヒナゲシさんは、再び炎を放つ。

炎は蟲(ベステート)に命中し、蟲(ベステート)の体が傾ぐ。

やったかーと思ったが、蟲(ベステート)は無傷らしい。

それを確認して、ヒナゲシさんが舌打ちする。

「離れて」

ヒナゲシさんは、そう叫んで櫓(そり)の方に戻っていく。

「急いで」

なんなんだ？

俺も慌てて櫓(そり)に向かう。

次の瞬間、蟲(ベステート)が体を丸めて、俺たちがいた場所を転がっていく。ヒナゲシさんに言われなければ、そのままペしゃんこになっていたところだった。

「撤退するわよ。櫓(そり)に乗って」

かんじきに慣れず、よたよたしていると、リュウドウさんが手を引いてくれた。

「ありがとうございます」

「いえ」

それだけ言い、すぐに櫓(そり)を出発させる。

櫓(そり)を追うように蟲(ベステート)が転がってくる。

「狼(ルーポ)、もう少し急いで」

了解、

言われたとおり、狼(ルーポ)は速度を上げる。

「うわっ」

「あわっ」

俺たちは、振り落とされないようにするので、精一杯だった。



「雛罌粟様、お怪我はありますか？」

「大丈夫よ」

なんとか逃げきった俺たちは、元の場所に戻ってきた。

あれから、蟲(ベステート)は姿を消してしまった。

もっとも、俺たちには対処するだけの力はなく、逃げるしかできなかったわけだけど。

「あの蟲(ベステート)は、かなりの外殻(がいかく)ね。あたしの炎が通用しない」

「それは、この環境のせいもあるのでしょうか」

「でしょうね。雪の中というのが、不利な状況だものね」

「はい」

ヒナゲシさんとリュウドウさんが、蟲(ベステート)の対策を考えている時、俺とキヨカは焚き火で暖をとっていた。

「ねえ、トールちゃん」

「なにも言うな。俺が役立たずだってのはわかってる」

「それもだけど……」

ああ、否定はしてくれないんだ。

「ヒナゲシさんに、修行をつけてもらったらどうかな」

「修行……？」

「そうだよ。だって、トールちゃんは、まだ風伯の本角力を使えないわけでしょ。でも、ヒナゲシさんは炎帝の本当の力を使えるよね。だったらさ、コツみたいなのでも教えてもらったらどうかな？ そうしたら、トールちゃんだってできるようになるよ」

「それは……俺も考えてた。俺が本当にできるのかわからないけど、できるようにはなりたい」

「トールちゃんなら大丈夫だよ。だって、一度できてるじゃん」

「……あれは、まぐれだって」

「まぐれだっていいじゃない。できたって事には変わらないよ」

「そんなもんかな……」

「トールちゃんならできるって」

まあ、嘘でもそう言ってもらえたら、少しはその気になるけどさ。本当に、俺ができるんだろうか？

「成功してるから、コツだって……」

「だから、まぐれだし」

「体が覚えてるよ、きっと」

「そんなもんかね……」

確かに、あの感覚は独特のものがあつた。だけど、それを自在に出せるかってのは別問題だ。それをするために、俺はどうすればいいのだろう。

「やっぱり、ヒナゲシさん頼みだろうな」

「そうだね。私からもお願いしてみるよ」

「いや、それは俺がするって」

それをキヨカ任せにするわけにはいかない。俺が教えを請われる立場なら、そういう相手には修行をつけたりしない。

「つうわけで、早速行ってみる」

「そう。頑張るってね」

見送るキヨカに、おうよ、と応えてヒナゲシさんの所に向かう。もっとも、それほど離れているわけじゃないんだけど。

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、まだ二人で深刻そうに話している。この状況で話しかけるのは、なかなか難しい。

タイミングを見計らっていると、向こうから声を掛けてきてくれた。

「どうかなさいましたか？」

「すみません、話のじゃまをしてしまって……」

「いえ、構いません。なにかございましたか？」

「お願いがあって来ました」

「お願いですか？　なんででしょう？」

ずっと考え事をしているヒナゲシさんを見る。

「ヒナゲシさん、俺に四刀の使い方を教えて下さい。俺を鍛えて欲しいんです」

深々と頭を下げる。

「ん？　えっ？」

ヒナゲシさんが驚いているようだ。俺は、頭を下げているので見えないんだけど。

「あたしがあなたに？」

「はい。お願いします。俺は、まだまだ四刀の扱いが未熟で、前の世界でも蜘蛛(アラネーオ)に助けてもらって、なんとかできたくらいで……。なので、俺だけでキヨカを護れるくらいにはなりたいたいです」

思いの丈を一気に告げる。

「……そう。わかったわ。あの蟲(ベステート)には、あたしの炎帝だけでは対抗できそうにないから、あなたの助力が欲しかったの。あなたが望むなら、教えましょう。もっとも、それは風伯があなたを真に認めなければ無理だけど」

風伯が俺を認める？

「あの……どういう事ですか？」

「風伯を抜いたあなたならわかると思うけど？　四刀は、それぞれが認めた所有者にしか使用できない。だから、あたしは風伯を使えない。あなたも炎帝を使えない」

そういえばそうだ。

「そして、四刀の所有者は、一振りにつき一人だけ。だから、あたしが炎帝に認められている間は、炎帝はあたしだけの刀というわけ」

「じゃあ、この風伯も……」

俺にしか使えないって事だよな。俺以外にはただの木刀に見える鞘に入った刀って事か。

「つまり、四刀が認めなくなれば、使えなくなる事もあるの。だから、四刀の所有者であるあたしたちは、常に精進し続けなければならないわけ」

「……………」

なるほど。つまり、あまり怠慢だと、四刀が俺を拒否するってわけか。どうなってやがるんだ、伝説の刀ってのは。まるで意思があるみたいじゃないか。

「とにかく、そんな後ろ向きな事は気にせず、使いこなすために精進したいというのは、いい事だと思うわよ。あたしができる限り、あなたの修練に付き合うから」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げる。

「もっとも、あなたが風伯を使いこなせないと、あたしたちが、あの蟲(ベステート)を退治できないからね」

「はい。お願いします」

じいさん以外から、こういう指導を受けた事はないが、じいさんと大差ないだろう。

「今すぐ始めたいんだけど……いいかしら？」

「望むところです」

俺としても、早く風伯を使いこなせるようになりたい。そして、蟲(ベステート)を封印したい。

「じゃあ、まずはそこに座禅」

「……………？」

ん？ 座禅？

「早く。今すぐ」

「は、はい」

茫然としていると、叱責された。

慌てて足を組んで座る。

……………って、冷たっ。

寒っ。

下は雪だ。

しかも、さっきまでは止んでいたのに、雪が降り始めた。

「本当なら、きちんとした服なんだけど、今はないからそれでいいわ。できれば、上着くらいは脱いでもらいたいところだけど……」

マジで？ 心臓が跳ねる。そして、背筋が凍る。

「雛罌粟様、それは少し酷では？」

「わかってるわよ。だから、そのままでもいいわよ」

その言葉を聞いて、ほっと一息。

本当に上着を脱がされでもしたら、俺は凍死してしまう。

安心したところで、心を穏やかにする。

っていうか、刀を振らないのか。

まあ、じいさんもまずは心を鍛えろ……って、言ってたような気がする。まあ、それでも竹刀でバシバシと叩かれてたわけだが。

「風伯を抱えるように持ちなさい」

「はい」

座禅をしたまま、風伯を抱えるようにして持つ。

「ゆっくりと、心を穏やかに。そして、風伯を自身の一部として感じられるようになるまで、心を風伯とひとつにして」

風伯は体の一部。

風伯は俺の一部。

風伯と俺は同一。

風伯の全てを感じろ。

風伯と一体になれ。

そう心に刻んで、すぐになにも考えない。

ただ、心を穏やかにする。

「風伯とひとつになったら、風を感じるはずよ。風を感じて」

風を感じる。

風の主たる風伯。

一度は、俺だって感じる事ができた。だったら大丈夫なはずだ。風伯は一度は俺を認めてくれている。本来の力を引き出せるはず。

「無理に感じようとしなくて。風伯と同一になれば、自然とを感じる事ができるわ」

なるほど。

なら、無理に意識しない方がいいってわけか。

今はただ、ゆっくりと心を落ち着かせればいい。

目を閉じてただ心を澄ませる。

穏やかに、穏やかに……。

……って、寒い。

心頭滅却すれば……なんて言うけど、実際どうなんだろうな。火は熱いし、氷は冷たいだろ。

それでも、こうしていると、なんだか寒さを感じなくなってくる気がする。

なんていうか、麻痺してきている感じだ。

……それって、マズくないか？

このまま、凍傷とか危険だろ。

だけど、このまま続けるしかない。

ここで中断したら、俺は風伯に認めてもらえそうにない。このまま続けてこそ、真の所有者になれるはずだ。

「トールちゃん、頑張って」

キヨカの応援が聞こえる。

ああ、頑張るさ。

俺はそれに応えないといけない。

風伯。

俺を信じてくれ。

俺は、風伯の期待に応えてみせる。

俺は、大切な人を護りたい。

世界を護るなんて、烏澁がましいのはわかってる。だけど、それでも護りたい。

ゆっくりと風伯に語り掛ける。

俺と一緒に旅を続けて欲しい。俺は風伯と一緒に旅がしたい。

俺は風伯とひとつになりたい。

ふわり。

少し軽くなった気がする。

風伯が.....なのか、俺自身が.....なのか。それはわからない。だけど、ふわりと軽くなる。

なんだ？

どうしたんだ？

なんだか、風伯を持っている手が温かい。

いよいよ、寒さのせいで、体が異常を訴えているのだろう。

とにかく、死なない程度ならいいか。

さすがに、ヒナゲシさんもその前には止めてくれるだろう。

このままの格好で凍ってるとかないよな。

ヒナゲシさんは炎帝を持ってるし、溶かしてくれる.....よな。その辺は、任せてもいいだろう

。

それから、どのくらい経ったかわからない。寒さのせいか……いやいや、俺が集中して無になっていたからだろう。そうに違いない。

なんだか、体が重くなってきた。

ってというか、動かない。痺れてきているのかもわからない。そう——感覚がなくなってきた。

「トールちゃん、生きてるう？」

キヨカの声らしいものが聞こえる。

「おおい、トールちゃん！ このニブチンやろう！」

耳が痛い。いや、物理的にな。寒さのせいで、耳が凍ってるみたいだ。お蔭で、キヨカの罵声が聞こえ……ないわけないだろ。

「あれえ？ もしかして、凍死しちゃった？ ……………ねえ、トールちゃん？」

キヨカが俺の肩を押す。

「ほわっ！」

俺はその力に任せるように、ころんと転がる。

「トールちゃん！ ちょっと、ヒナゲシさあん！」

キヨカが慌ててヒナゲシさんと呼びに行ったようだ。

俺は、ころんと座禅を組んだ姿のまま、雪の上に転がっている。

さて——どうしたものか。

生きてはいる。

なにをされたか、なにを言われたかはわかる。

しかし、体が動かない。

冷凍されるって、こういう感じなのかな。

「ヒナゲシさん、トールちゃんが。トールちゃんが」

キヨカが泣きそうな……ってというか、半ベソ状態で走ってくる。

「どうされたのですか」

ヒナゲシさんも来てくれたようだ。

ってというか、さすがに俺の傍にずっといたわけじゃないんだよな。いつからいなくなったのか、全然知らなかったよ。

「トールちゃんが、トールちゃんが動かないんです」

「京極さんが？ まさか……」

声から、きっと青ざめているんだろうな……ってのはわかる。だけど、顔が動かないから、そっちを見る事ができない。

「龍堂、狼(ルーポ)を」

「はい、雛罌粟様」

もわもわと、俺の近くでなにか大きなものが動いている。きっと、狼(ルーポ)だろう。

「狼(ルーポ)、京極さんは？ 彼は大丈夫かしら」

どうやら、俺の様子を狼(ルーポ)を使って確認しているらしい。俺は生きてるんだがな。  
くんかくんかと、狼(ルーポ)が俺の体を嗅いでいるようだ。そして、ぺろぺろと舐められている。  
アイスクャンディーのように食べられてしまうんじゃないだろうか。

生存確認、

ほっ。

死んだと思われたらどうしようかと思ったぞ。

「よかったよお」

キヨカが安心したようで、その場に座ったらしい。なんとなく、雪の音とキヨカの行動パターンで予想する。

「よかったわね。どうやら、寒さのあまり動けなくなっているみたいね。暖めれば大丈夫でしょう」

「雛罌粟様」

「そうね。やりましょうか」

ん？

ま、まさか……。

いや、それは効果的だと俺も思うんですよ。でも、もしも熱すぎたら……。それに、暖められて溶けてしまったりしたら……。

それを考えると怖い。

期待と不安が半々……というか、不安が若干多いかも。

「ヒナゲシさん、やっちゃって下さい」

おいおい、キヨカ。もうちょっと、心配というか、慎重に頼む。

「わかったわ」

ヒナゲシさんが炎帝を抜いたようだ。

「京極さん、熱くても我慢して下さいね」

返事できないんですよね。

っていうか、向こうは聞こえてるかもわかってないだろ。俺はされるがままだ。

「ヒナゲシさん、お願いします」

キヨカの声に、ええ、と答えて、ヒナゲシさんが炎帝を近付けてくる。

……………熱っ。

なんだか、体の芯から溶けていくみたいだ。

熱い熱い熱い熱い熱い。

だけど、お蔭で少しずつ体を動かせるようになってきた。

熱い熱い熱い熱い熱い。

「トールちゃん、どろどろに溶けて、生き返って」

いや、死んでないんだけどな。それに、どろどろに溶けたら、それこそ死んでしまうと思うんだ。

じわじわと、俺の体が溶けている。

「————熱い、熱い熱い熱い」

ようやく声が出た。

そして、ようやく体が動く。

熱いつての。

ごろごろと転がって、ヒナゲシさんから距離をとる。

「トールちゃん、よかったよお」

キヨカがぼすっと抱きついてくる。

「うわっ、熱い。なんだか、ベトベトだよ」

そして、すぐに離れていく。

「よかったわ。生きていたようで。あのまま死なれたら困るものね、遠野さんが」

「本当に、ご無事でなによりです」

なんだか、本気で心配してくれたのは、リュウドウさんだけのようだ。

「……………はあ、熱かった。それにしても、助かりました。ありがとうございます」

あのままだったら、徐々に凍って大変な事になっていただろう。

「よかったです。それにしても、そんな風になるまで集中されていたのですか」

「素晴らしい集中力ですね」

ヒナゲシさんとリュウドウさんは褒めてくれているようなのだが……あまり嬉しくないのはどうしてだろう？

「ってというか、凍るまでするなんて、ただの莫迦でしょ。普通はその前にやめるでしょ」  
ですよねえ。そこまでするなんて、やっぱ莫迦だよ。俺だってわかってたよ。

「とにかく、ご飯だよ」

「……………はい？」

唐突になんだ？

「夕餉(ゆうげ)です」

「夕餉でございます」

……………ユウゲ？

……ちょっと、思考が。凍っていたせいか、頭がうまく働かない。

「だから、晩ご飯だよお」

ユウゲって夕餉か。なるほど。そんな時間なんだ。

「というわけで、早く来ないと、なくなっちゃうよ」

「急いで下さいね」

「お待ちいたしております」

それぞれそう言うと、俺を残して戻っていく。

「お、おおい」

俺は解凍されたばかりで、まだ思うようには動けないんですよ。できれば、狼(ルーポ)の背中に乗せてもらえたら……。

そんな心の声が届くわけもなく、俺はその場に取り残された。



ちくしょう。

なんとしても行かないと。そこには焚き火がある。

きっと、温かい料理だってあるだろう。

ずりずりと雪の上を這っていく。

——それからしばらくして、ようやく俺は夕餉の席に着く事ができた。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

「遅いよ、トールちゃん」

「京極様、温かい飲み物をどうぞ」

ああ、リュウドウさんは優しいな。見た目とか印象は怖いけど、本当は心の優しい人なんだよな。

渡された器は……、

「熱っ」

すっげえ熱かった。

中に入っているものが熱いってのもあるだろうし、俺の手が冷たくなっているせいもあるだろう。両方が合わさると、とてつもない相乗効果だったりする。

あまりの熱さに、思わず器を落としてしまう。

中には、なにか液体が入っていたようで、その熱い液体が雪を溶かす。

「ああ～、トールちゃん、失礼だよ」

失礼とかそういうんじゃないだろ。まあ、失礼だとは思うけどさ。

「すみません」

「いいえ、気になさらないで下さい」

そう言って、リュウドウさんはもう一度注いでくれる。

「ありがとうございます」

今度は落とさないように気を付ける。まあ、熱いのはどうしようもないので、袖を伸ばして掴む。

「おおっ、あったかい」

ふうふうと冷ましてから、器の中の液体を飲む。香りからするに、お茶のようだ。

「うう～、あったまる」

体の中から温まる。

食道からずっと、お茶の通り道がはっきりわかる。

「美味しい……」

「でしょ？ リュウドウさんの淹れるお茶って、すごい美味しいんだよ」

確かに旨い。

なによりも、温かいものってというのがいい。

体の芯から温まるってのはいいな。

はふはふと少し冷ましながら飲む。

なんだろう。こう、懐かしい味だ。

……って、日本茶だよな。

やっぱり、これが落ち着く。馴染みの味ってやつだな。

「これって、榊都の名物茶ですか？」

キヨカがなにかをもぐもぐさせながら訊く。

「いいえ、京のものよ。宇治の方だったかしら」

「はい、宇治のものでございます」

「そうなんだ……」

なるほど。宇治茶ってわけか。まあ、そんなに銘柄に拘って飲んだ事がないから、その違いがわからないけど、なんだか落ち着くんだよな。

落ち着いたからだろうか、途端に空腹感が。

「……って、なに食ってんだよ、お前」

そういや、さっきからなにかもぐもぐしてるよな。

「んふ？ ほひひほはほ」

食べながら喋るな。

「口の中がなくなってから言え」

キヨカはごくりと口の中のものを飲み込む。

「トールちゃん、おじいちゃんみたいだよ」

そういう問題か？ つうか、母親じゃないんだな。そういや、こいつはずっとじいさんのところにいたんだっけか。

いやいや、そうじゃなくてだな。

「お前、なに食ってんだ？」

「なにして、干し芋だよ」

ほれ、とキヨカが手に持ったそれを見せる。

……確かに干し芋だ。

「それ、どうしたんだ？」

俺たちは、そんなものを持っていない。もしかして、こいつは密かに持っていたのか？

「ヒナゲシさんに貰ったんだよ」

なんだと？

ヒナゲシさんの方を見ると、

「はっ」

ヒナゲシさんも干し芋を食べている。さらに、リュウドウさんまで。

「キヨカ、俺のは？」

「トールちゃん、がめついよ。食料は自分で調達しないと」

「……………」

いや、それはもっともだがな。

だったら、お前はどうしたんだと問いたい。それはヒナゲシさんに貰ったと言っていたよな。それって……いや、それもある意味じゃ調達か。

俺も恵んでもらうしかないよな。この状況で、他に食料があるとも思えない。

ちらりとリュウドウさんを見る。

「京極様の分は、先程遠野様にお渡しいたしました」

「……………へっ？」

ぱっとキヨカを見る。

「キイヨおカあ」

ぎろっとキヨカを見るが、キヨカはそんな視線を気にする事なく、もぐもぐしてやがる。

「お前、それって俺の分じゃ……」

「んふ？」

干し芋をくわえながら首を傾げる。

そして、それをもぐもぐと口の中に入れて、

「食べちゃった」

「……………」

思考が停止した。

こいつ、なんて言った？

今、なんて言いやがった？

俺の聞き間違いか？

食べちゃったとか言わなかったか？

冗談……だよな。

大切な食料だよな。

「ごめん、トールちゃん。フタリブンダッタナンテシラナカッタダ」

「おい、なんだその棒読みは。わざとだろ」

「ツイウッカリタバチャッタダ」

「……………もういい」

わざとだ。

確信犯だ。

言葉が出てこない。代わりに、腹が……。

くう～。

食べるものがないとわかると、余計に腹が減ってきた。

「だって、トールちゃんは寝ちゃってたし。可愛いキヨカちゃんが飢えたら大変でしょ」

えへっ……とかされてもな。

その代わりに俺が飢えてもいいと？ そういうわけか。

「京極様、こちらを」

横からひょいと干し芋が差し出された。

「でも、それって……」

「構いません。京極様は、これから修練を重ね、四刀を使いこなさなければならない身。空腹ではお辛いでしょう」

……………なんてこった。

こんなに気を遣わせてしまっている。

支家は四護に仕える者らしいが、それにしたってこれはおかしいだろ。そもそも、この人はヒナゲシさんの支家であって、世界も時間も違う俺たちに、ここまでする必要はない。

それでも、こうするってのが支家なのか。

「食べなさい。少しでも体力を付けないと、この先保たないわよ」

「ほら、ヒナゲシさんもああ言ってるし」

「……って、全部キヨカのせいだろうが」

言うと、キヨカはそばを向いて口笛を吹き始める。

ああ、こいつの口笛は巧いよな。

いやいや、感心してる場合じゃない。

「誤魔化すなよな」

「しょうがないでしょ。過ぎた事を言っても、どうにもならないわよ。とにかく、今は最善を尽くしなさい。あなたは、風伯を使いこなすという使命があるんだから」

「そ、それはそうですが……」

なんとなく、誰かの分を分けてもらうってのが……。って、そもそも分けて貰ってるんじゃないか。

「すみません。ありがたくいただきます」

俺は干し芋を受け取り、口に含む。

ああ、堅いな……。でも、旨い。干し芋って、こんなに旨いものなのか。

泣けてくる旨さだ。

「それにしても、あなたたちの旅って、行き当たりばったりのようね。携行食もないなんて」

うっ……。確かにそうだ。俺たちは、こういう保存食を用意していない。

出発する時も、その前に準備している時も、全く考えもしなかった。

食事なんて、その世界でなんとかなると思っていただろう。実際、これまではなんとかなっていた。

しかし、こういう状況もあるんだ。

誰もいない。なにもない。

こうなった時、俺たちは飢えるしかない。

俺たち、旅してもんを甘く考えていたのか。地球上での、普通の世界旅行ならまだなんとかなっただろう。北極とか南極とか、そういう場所に行くとしても、目的地がわかればそれなりに準備もしただろう。

だけど、俺たちの旅は目的地がわからない。地球上じゃない場合もある。だからこそ、どういう状況下でも対応できるようにしておかないといけなかったのに。

完全に準備不足だ。

それがわかったとしても、今からじゃどうしようもない。

せめてできるのは、次の世界でそれを調達できればする事か。そういう必要があるとわかった事は収穫だった。

「旨い……旨い……」

もぐもぐと干し芋を食べる。

量は少ないし、満腹になるほどでもないが、なんだか胸がいっぱいだった。

そんな食事を終え、俺たちは寝る事になった。

野宿を考えて、簡易的なテントと寝袋は用意していた。もっとも、テントといっても、雨を凌げる程度のものなので、保温性はない。寒さはどうにもならない。それは寝袋でなんとかなるだろう。

「それじゃ、また明日、修練を続けるわよ」

「はい。お願いします」

こうして、俺の修行の日々が始まった。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

「風伯が風を纏うのを想像して」

あの座禅をあれから三日続けて、ようやく刀を持っての修行が始まった。

風伯を鞘から抜き、その状態でずっと構える。

その状態で集中して、風伯が風を纏うのをイメージする。

それを始めて、かれこれ三時間は経ってるんだろうか。正確にはわからないが、俺としてはそのくらい経っている。

風伯が風を纏うイメージ。

実際、俺は前の世界でできたんだ。

偶然にしろ、その感触がある。だから、イメージしやすいはずなんだ。だけど、現実にはなんの変化もない。

この世界に馴染んできたのか、修行中は集中しているからなのか、寒さにはなんとか耐えられるようになってきた。

「トールちゃん、頑張れ」

応援しているキヨカも、なんだか飽きてきている感がある。

そりゃ、四日もこうしてりゃな。そろそろ見てるだけだと飽きるだろう。俺としては必死なんだがな。

「しょうがないな……。トールちゃんのイメージのお手伝いをしてあげようか」

そう言うと、キヨカはごそごそと荷物から、細長い箱を取り出した。

その中に入っていた、いくつかに分かれた銀色をそれを組み立てている。それはもう、慣れた手つきだ。

「完成だよ」

出来上がったのは、金属製の木管楽器だった。

キヨカは、その吹き口に唇を当てる。

すると、清らかな音色が周囲を包んだ。

「すごいわね……」

「素晴らしいです」

突然の事に驚きながらも、ヒナゲシさんとリュウドウさんもキヨカが奏でる金属製木管楽器フルートの音色に耳を澄ませる。

その音色は、まさに風のようなだった。

この寒い世界に吹いた温かい風。

それが、キヨカの音だ。

キヨカが奏でる風。

そういや、逢稀村でじいさんにしごかれてた時も、キヨカのフルートの音色があったっけ。俺にすれば、これぞまさに修行中って感じだよな。

「サンキュな、キヨカ」

キヨカは頷いて答える。

キヨカの音があれば、できそうな気がしてきた。

風伯の周囲を音が舞う。

その音が、風を生み出している。

「風伯よ、その力を見せてくれ」

ぎゅっと力を込める。

瞬間、音が風伯に纏わりついた。

絡まるようにした音が、風伯の刀身を包む。

これは、いけるかも。

そう確信して念じる。

風伯よ、その力を顕せ！

刹那、俺は吹き飛ばされそうな力を感じた。

ぐっと踏み込んでいないと、飛ばされてしまいそうなその力。なんとか踏ん張れ。ここで負けたら、俺は……俺は……。

風伯に認められるためには必要な事だ。

ここで負けるわけにはいかない。

信じてくれ。

風伯よ、俺にその力を委ねてくれ。

必ず、俺は受け止める。そして、全てを引き出してみせる。

だから――頼む。

「トールちゃん！」

「京極さん」

「京極様」

キヨカたちの声だけが聞こえる。

俺の周囲を風が舞う。

次第に、その声が聞こえなくなる。それどころか、音が消えていく。

風の音すらしない。

これだけ俺の周りを渦巻くように吹いてるってのに。

どうなってんだ？ なんだ、この静けさは。あり得ないだろ。

目を開けてるが、なにも見えない。ただ、風が渦巻いている。そして、俺の周りに壁のよう……。

キヨカ？

ヒナゲシさん？

リュウドウさん？

誰の姿も見えない。

どうなったんだ？ 俺だけ、違う空間にいるのか？

さっぱりわからない。



蜘蛛(アラネーオ)! 忘れてくれ! 蜘蛛(アラネーオ)!

もう、この状況で頼れるのは蜘蛛(アラネーオ)だけだ。蜘蛛(アラネーオ)ならなんとかしてくれるかもしれない。

蜘蛛(アラネーオ)! 頼む! お願いだ!

――しかし、なんの反応もない。

どうなってんだ?

淋しくなってきた。

おいおい、このままどうにかなっちゃうのか?

キヨカ。

キヨカ。

キヨカ。

キヨカ。

キヨカ!

「トールちゃん!」

キヨカ?

キヨカの声だ。

キヨカがいる。それだけで安心できる。

キヨカがいる場所に戻るんだ。

風伯を思い切り振り上げる。

体を持っていかれそうになる。

なんとか力を振り絞って体を支える。

戻るぞ。

戻るんだ!

今の風伯には風がある。

風伯の周囲の風で、俺の周囲の風を吹っ飛ばすんだ!

いっけえ!

吹き飛ばせえっ!

風伯よ、その力を俺に貸してくれえっ!

風伯を力一杯振り下ろす。

風伯の周囲の風が、俺の周囲の風に突き刺さる。

貫けえっ!

斬り裂けえっ!

突き抜けるおっ!

轟々と風が唸る。

風と風が闘ぎ合う。

頼む。

風伯の力で風を突き破れ!

吹き飛ばせえっ！

心の中で念じる。念じて。念じて。念じて。念じて。念じて。念じて。念じる。

いっけえっ！

念じる！

風伯の風が、周囲の風を押し退けていく。

そのまま。

そのまま。

そのまま。

そのまま打ち抜けっ！

頼む。

ぱっと風が散った。

「トールちゃん」

キヨカが駆け寄ってきて、抱きついてくる。

「うわっ」

あまりに予想外すぎて、俺は押し倒されるように後ろに倒れる。

「大丈夫ですか」

「まあ、大丈夫でしょ」

心配そうなリュウドウさんの声とは対照的に、ヒナゲシさんの声はどこか呆れがあった。

しかし、俺はキヨカに抱きつかれて……というか、抱きしめられて……というか、締め付けられて、苦しかった。

「キ、キヨカ……」

ちょ、マジで苦しいんだが。

しかも、背中が冷たい。うわっ、首の辺りから雪が……。冷たいっての。

なんとか逃れようとするが、それをさせまいとキヨカが、さらに俺を締め付けてくる。

ぐ、ぐええええっ。

「遠野さん、そのくらいにしておいたらどうかしら」

ヒナゲシさんに声を掛けられ、ようやく今の状況を理解したのか、ようやく解放された。

「ほ、ほええっ？ ……って、トールちゃん？ どうしたの、トールちゃん」

肩を持って、がくがくと揺すられる。

あ、あわわ、あわわわ、あわわわわわっ。

頭がぐわんぐわんする。

なんだか、状況は好転していない。

むしろ、こっちの方が……。

「遠野様、そのくらいに」

リュウドウさんにも言われ、ようやく俺は解放された。

「た、助かった……」

キヨカから解放された俺は、雪の上に大の字になる。もう、冷たいとか寒いとかどうでもいい。この自由に感謝。そして――みんながいる事に感謝。

「はっ、ははっ……」

なんだろう。

無性に可笑しくなってきた。

「どうしたの？ トールちゃん、壊れた？」

失礼な。

まあ、わからなくはないか。急に笑い出したら、誰だってそう思うだろう。不審だよな。

だけど、何故だか笑えてくるんだ。

安心したせいかな。

だから、笑いたいんだ。

笑っていたいんだ。

「まあ、変なのは前からだよな」

なんだろう。

「京極様、おめでとうございます」

ん？ どうしたんだ？

「ようやくね。まだ、これを自由に使えないと意味がないんだけど」

ん？ なんだ？

よくわからないぞ。

「トールちゃん、すごかったよ」

キヨカまでどうしたんだ？

……って、そうだ。

なんだかすごい風が……。

「なあ、俺ってどうなってたんだ？」

「あのね、トールちゃんはね、すごかったんだよ。風がね、びゅうってなって、ごおおおってなって、ずびゃびゃびゃってなってたんだよ」

よくわからんが、とにかくそういう状態だったんだ。

「風伯の試練だったのかしらね。あたしの時も、急に炎に包まれて、炎帝の炎を感じて、その炎で相殺したものよね」

「そうでしたね。雛罌粟様の時は驚きました。あのまま、炎に包まれてしまったらどうしようかと」

「あたしも思ったわよ。このまま灼け焦げたらどうしようかって。でも、不思議と怖くなかったのよね」

なるほど。ヒナゲシさんもそうだったのか。

懐かしそうに話しているのを見ていると、和むな……。

俺も、いつかそういう懐かしい気分になれるのかな。

「でも、まだ風伯の風を感じただけ。この風を自由に使えるようになる修練が必要よ」  
はあ～。

……………まだまだか。

ようやく、第一歩ってところか。

「すごいよ、トールちゃん。風伯を使えるようになったんだね」

「だから、まだだっただけ。ようやく、認められたって事だろ」

これからも精進って事かな。

「もう一度、やってみる」

この感覚を忘れたくない。

「……難しいと思うわよ」

そんなヒナゲシさんの声が聞こえた。

それを気にする事なく、俺は風伯を構える。

そして、風伯が風を纏っているイメージを……………。

……………。

……………。

……………。

あれ？

あれれ？

あれれのれ？

なにも起こらない。

「やっぱりね」

ヒナゲシさんは、わかっていました、という風に呟く。

「どういう事ですか？」

「風が使えても、すぐには難しいでしょうね。最初はね、なにか呼び水のようなものが必要かもしれないわね」

「呼び水？」

キヨカが首を傾げる。

「そう。きっかけ。それが必要じゃないかと思うの」

きっかけ……………。

「最初は、なにかの補助なしでは難しいでしょうね。そんな簡単に使えるものじゃないわ」

「なるほど……………」

キヨカが腕を組んで頷く。

確かに、最初は補助が必要か。

そんな簡単に使えるものじゃないよな。なんたって、伝説の刀だし。

「トールちゃんの補助ってなんだろう？ なにかなあ？」

なんだろうな。

俺の呼び水か……。

なにが必要なんだろう。

さっきはどうだったっけ？ 風伯に風を感じた時は……。

う～ん。

キヨカと見つめ合うように考える。

なにかあるだろうか。つうか、なにかあったか？

俺が風伯を持っていた時か……。

「ねえ、トールちゃん」

「ん？ なんだ、キヨカ」

「これって……違うかな？」

そう言いながら、キヨカは手に持っていたものを俺に見せる。

「それって……」

手にあるのは、銀色をした木管楽器。

確かにその音色は、俺を落ち着かせてくれる。

「それがいいんじゃないかしら」

「そうですね。遠野様の笛の音色は素晴らしいと思います」

ヒナゲシさんとリュウドウさんも賛同する。

「俺も、それがいいと思う」

「トールちゃん、偉そうだよ」

「……すまん」

とにかく謝っておく。

「よしよし、素直でよろしい」

なんだかムカつく。

「殊勝なのはいい事ですよ」

ヒナゲシさんまで。女って怖い。

「それじゃ、京極さんの呼び水は、遠野さんの笛の音ですね」

「トールちゃんの……っていうか、風伯の呼び水か。頑張るよ、私」

キヨカはぐっとフルートを握りしめる。

「じゃあ、頼むわ」

「私がないとダメなんだよね」

うっ。その言い方はなんだかな……。

「それじゃ、試してみまじょうか」

「そうですね。その音色が、呼び水として成立するか、試してみませんか」

なるほど。本当にそれで、風を感じる事ができるのかわからないよな。

「じゃあ、吹くね」

そう言うと、キヨカはフルートを構える。

「トールちゃん、頑張ってる」

そして、キヨカは音を奏でる。

「よっしゃ。やったるか」

俺は風伯を構える。そして、ゆっくりと目を閉じる。

感じるのはキヨカの音色。

そして、音という姿をもった風。

音の風が風伯を包む。

よし、いけそうだ。

これなら、風を感じる事ができる。

「トールちゃん、いっけえ！」

「おうよ」

風伯が纏った風を、薙払うように放つ。

ぶおんと音を立て、風が世界を斬り裂く。

遠くで雪煙が上がる。

「すご〜い」

「.....」

すごってもんじゃないだろ。

なんだ、これ。

世界が雪煙で覆われている。

これを俺がしたんだよな。

「すごいわね。風伯のこの力があれば.....」

「雛罌粟様の炎帝の力を超えているやもしれませんね」

「ええ、本当に。ここまでなんて.....。譜遊の四護が逢稀の四刀を使っているなんて、信じられない。逢稀の四護の補助があるにしても、これってすごいわね」

「やはり、四護同士という事でしょうか」

「わからないわ。そうかもしれないけど、それだけじゃないかもしれない。この二人、普通とは違うようだから」

「そうですね」

ヒナゲシさんとリュウドウさんも驚いているが、俺たちも驚いている。

まさかの威力だった。

「トールちゃん、すごいよ。これなら、蟲(ベステート)なんて簡単に倒せちゃうかも」

「いやいや、それは無理じゃないか」

そう言いつつも、内心では俺もそう思っていた。これだけの力があれば、蟲(ベステート)だって一刀両断できそうな気がしてくる。

「呼び水は成功のようね」

「はい」

「私のお蔭だよな」

「そうだな」

素直に褒めてやると、キヨカはえへへと照れる。

「それじゃ、呼び水をしての修練をしましょうか。そして、いずれは呼び水なしで力を発揮できるようにしましょう」

……そうだった。

すごい威力に驚いて、圧倒されていたが、俺はまだ補助付きだった。

これを一人でできるようにならないとダメなんだよな。

「補助付きでもいいじゃない。私なら大丈夫だよ」

キヨカが笑顔を向けてくる。

キヨカはそう言ってくれるが、やっぱり一人でできるようにならないとな。

「よし。特訓だ」

「おう、頑張るぞ」

キヨカはフルートを持った右手を高々と挙げる。

「トールちゃんも」

「お、おう。頑張るぞ」

催促されて、俺も風伯を持った右手を挙げる。

「ガンバロー」

「ガ、ガンバロー」

それからは、キヨカのフルートを聴きながらの特訓が続いた。それ自体は、逢稀村にいた頃と一緒なので、自然と落ち着くし、集中もできる。

かれこれ三日。フルートの音色という呼び水があれば、なんとか自由にできるようになってきた。

「なかなかいい感じね」

「そうですね。まだ呼び水が必要なようですが」

「それでもいいんじゃないかしら。あの二人は、その方が力を発揮できそうな気がするわ」

「そうですね」

「あたしたちも負けていられないわね。炎帝の力を今以上にしないと、あの蟲(ベステート)に通用しそうにないわね」

「我々も修練でございますね」

「そういう事ね」

こうして、ひたすらに修練が続いた。

心の歌を奏でて 一四護邂逅一 ㊤

<http://p.booklog.jp/book/48886>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48886>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48886>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ